

## 『破戒』における二重構造に関して：風景描写に潜在している隠喩を中心に

ストラック, ダニエル  
北九州市立大学

<https://doi.org/10.15017/16062>

---

出版情報 : Comparatio. 12, pp.10-19, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 『破戒』における二重構造に関して

——風景描写に潜在している隠喩を中心に——

ダニエル・ストラック

はじめに

文学作品であれば、表現体の基本的な意味の背後には思想がある。しかし、リアリズムの立場で執筆されている散文は、隠喩的な性質が少なく感じられる場合が頻繁にある。従って、小説など、散文で書かれている文学作品における二重構造は比較的に特定し難いと言える。それにもかかわらず、文学の特徴に潜在的なメッセージの包含もあるのであれば、散文においても、作品を十分に理解するために、両立している二つの意味レベルを把握する必要があろう。

自然界を道具の一つとして利用する作家は、リアリズムを徹底しながらも、作品全体における叙情的な効果を文字通りの意味よりも遙かに高めることができる。現実生活では葬式の日が曇っていれば、偶然だろうと判断できるが、小説は虚構の世界であるからこそ、同様な状況が生じた場合に意味付けを行いたくなる。『破戒』に接する読者は自然描写を通して無意識的に感情を操作されていると言える。本稿は、以上のような問題意識に即しつつ、島崎藤村の『破戒』における意味の二重構造及び思想上の展開に関して検討しようとするものである。

### 一. 『破戒』における自然描写と叙情

『破戒』において、自然が綺麗に描写されている場面は複数あるが、中でも物語の後半で瀬川丑松が冬の千曲川周辺を眺めて、自分の運命に関して考える場面（注1）はその好例であると考えられる。丑松はある船橋の周辺に立ち、橋の方へ移動し、最後にその上に立つが、周りの風景を眺めながら、自分の問題や人生に関して熟考する。この場面においては、丑松の葛藤と、その感情を叙情的に表現する描写があると思われるため、徹底的に分析していきたい。

最初に話者は、千曲川に向っている丑松の視点からの眺めを全貌する。

遠くつゞく河原は一面の白い大海を見るやうで、蘆荻も、楊柳も、すべて深く隠れて了つた（中略）對岸にある村落と杜の梢とすら雪に埋没れて、幽に鶏の鳴き声がする。（二五〇）

この個所で主人公は周囲を眺めているが、雪に埋もれ、霧に隠れている周囲の風景が鮮明に見えないことが強調されている。丑松はこの時点において戸惑っているために、風景の様子が朦朧としていたことは、彼の心理的な状態と重なっているように映る。しかし霧の中から風景の一部が見えてくることも描かれている。

斯ういふ光景は今丑松の眼前に展けた。平素は其程注意を引

かないやうな物まで一々の印象が強く審しく眼に映つて見えたり、あるときは又、物の輪郭すら朦朧として何もかも同じやうにぐら／＼動いて見えたりする。(二五〇)

この描写においては風景の物理的状态のみを描いているはずであるが、その具体的な表現の裏には、人間関係の複雑さが含まれていると考えられる。同僚や社会における様々な知り合ひは丑松に対して、表面的には好意を持つているように思われていたが、この時点ではそうではなかったことが明白になる。

しかし、先の解釈に対して疑問を容易に投げかけることもできない。この自然描写は、単に風景を詩的に描写しているのみではないだろうか。その次の個所を読むと、隠喩的な側面が包含されている可能性がある。彼が眺めている風景と完全に連結するように、丑松の人間関係が原因である戸惑いは直ちに表現されることになる。

『自分は是から将来奈何しよう——何処へ行つて、何を為よう——一体自分は何の為に是世の中へ生れて来たんだらう。』

(二五〇)

明らかにこの個所は丑松のその時点における心境をその直前の風景描写に繋げる役割を果たしている。藤村は自然風景を利用して、主人公の心境を抽象的に描いている。

川の周辺を眺めた後、丑松は船橋へと移動し始める。大体にお

いて、川に架かっている橋の高度は水面よりも高いために、川への見晴らしは比較的よい。心理的混乱に陥っている丑松は人生に対する理解を希求しているが、一般的に人生における時間の経過は川の流れに喩えられているため、橋への移動は芸術上においては当然の行動である。筆者の先行研究においては、文学作品における登場人物が橋の上に立つて川を眺めて考える場合に、その橋は人生に対する洞察力を与える場所になることが判明している(注2)。この傾向はメタファー論の形式では「超越的な視点から透視するのは橋から眺めることである」と表現できるが、この隠喩は『破戒』のこの場面においても機能していると考えられる。

藤村は丑松の橋への接近を意外と詳細に描写している上、その移動によって、視野が広がって見晴らしがよくなったということも実際に表現している。

河原の砂の上を降り埋めた雪の小山を上つたり下りたりして、  
懸て船橋の畔へ出ると、白い兩岸の光景が一層広濶と見渡される。(二五一)

この新しい観点からも、やはり人生の真の姿を観察することが可能になる。

目に入るものは何もかも(中略)いづれ冬期の生活の苦痛を感ぜさせるやうな光景ばかり。河の水は暗緑の色に濁つて、嘲りつぶやいて、濁れて死ねと言はぬばかりの勢を示し乍ら、

川上の方から矢のやうに早く流れて来た。(二五二)

丑松がこの新しい眺めによって気づかされるのは、人生の苦しみを隠喩的に表現している川の様子であり、擬人化を通して、彼は川に自殺を促すような呟きを聞き取る。

実は、橋の上からの視野が妨げられない眺めであるため、『人生の川』は鮮明に見えるようになるが、それ故に丑松の憂鬱は逆に深刻になる。語り手は「深く考へれば考へるほど、丑松の心は暗くなるばかりで有った」(二五二)と表現しているが、橋の上からのよい見晴らしの描写を通して丑松の人生に対する悲観的な見解が誤解に基づくのではなく、正当な理解であることを読者に主張するのである。

ちょうど丑松が船橋の上に立っていると、彼は辺りが「日没」(二五二)を迎えていることに気づく。人生は一日に喩えられることがあるが、この設定においては日没が太陽の死の瞬間に当たるのである。日没を見る丑松は、川に身を投げ溺れ死ぬべきか、屈辱的な道を歩き続けるべきかという葛藤に苛まれる。丑松が橋の上でこの困難な選択を迫られ葛藤している事実は、橋の上で考えているからこそ前景化されていると言える。

このページの最後に丑松が橋の上で自らの道を決定する際、蓮華寺の鐘の音が聞え、「丑松の耳に無限の悲しい思を傳へた」(二五二)と表現されている。数十年後、ヘミングウェイはジョン・ダンの著名な詩(注3)を引用し、運命という主題を取り上げた小説を『誰が為に鐘は鳴る』(注4)と名づけることになるが、藤

村のこの描写においても、鐘の音は個人の無力や死の必然性という意味を伴いつつ響く。

## 二 『破戒』における構造と思想の関係に関して

文学作品には、言語表現の基本的伝達レベルを超えた思想レベルのコミュニケーションが存在する。多くの研究者は『破戒』を解釈しようとする際、作中の深層構造を把握しようと試みている。例えば、三好行雄は作品の内的構造を分析した。(注5)表面的な出来事を表現すれば、丑松は社会の迫害に打ち勝てないが、自らの恐怖を乗り越えることはできると言える。しかし、観念レベルにおいては告白を通して、丑松は心理的に宿命の束縛から解放される。(注6)従って、物語の設定は同和問題という具体的なものであるが、丑松が抱える独特な状況を通して、藤村はより普遍的な人間のあり方に関する問題を提起していると言える。三好のこの見解は妥当だが、『破戒』は余韻を残す複雑な作品であるからこそ、他の内的構造の存在も考えられる。

伊狩弘も『破戒』の内的構造(注7)に関して検討してきた。陰鬱な天候が描写されている初冬の物語であるにもかかわらず、丑松は急ぎ足で故郷の小諸に帰り、一時的に猪子先生の元に駆けつけ、その後飯山の教室に戻り、最後に大日向と一緒に米国のテキサスへと出発する可能性が示唆されている。伊狩は、この頻繁な移動を通して、『破戒』においては「時間と空間の不均等な広がり方」(注8)が生じていると論じている。筆者はこの見解に同意するが、作品の構想を鮮明にするために伊狩が指摘する移動の構

造を更に詳細に検討する必要があると考える。

橋は文学作品において注目すべき要素である。文学作品に表面の出来事と裏面の観念という二重構造が存在しているならば、橋という事物は思想のレベルにおいて如何なる機能を果たすだろうか。作中において二つの思想的領域の間の相違が表現されている場合、作家は「橋」という具体的描写を通してそれら二つの異なる領域を結ぶことができる。『破戒』の思想レベルには、その当時の一般的な日本社会の人々と出身地によって不当な差別を受けている人々との間に存在する断絶関係が描かれているため、橋が作中に登場する場合、それは両者を和解へと導く道具として登場することが予測される。このメタファーは《人間関係の発展は橋を渡ることである》と表現できるが、以下では作中に登場する橋の描写を一箇所ずつ詳細に分析していくことによって、この予測の妥当性を立証したい。

『破戒』には橋が頻繁に登場する。しかし、橋の描写が頻繁に登場しても、その描写の分量は均等ではない。橋が描かれる場合、それらは限られた数箇所に集中している。最初の橋の描写は上田の「停車場」(二三六) 近辺の叙述に登場する。橋を渡って、丑松は蓮太郎と別れなければならないため、この橋は「別離の橋」(《人間関係の終結は橋を渡ることである》)として登場していると言える。丑松は蓮太郎に自分も同和地区出身者であることを告白しようと考えていたが、蓮太郎の出発によって、この機会を逃す。この個所で橋と駅を描きながら、藤村は丑松が告白しなかったことを強調しようとしているのではないかと考えられるのである。

次に橋が登場するのは、丑松が船で上田から千曲川を經由して飯山に帰る場面(二五二)である。これらの橋は「船橋」、または「渡し」と呼ばれている。「渡し」の通常の意味は「渡し船」であるが、藤村が利用している「渡し」は仮設されている橋を指している(二五二を参考)。その説明は次の通りである。

尤も、其間には、ところぐの舟場へも漕ぎ寄せ、洪水のある度に流れるといふ粗造な船橋の下をも潜り抜けなどして、そんなこんなで手間取れた為に、凡そ三時間は船旅に費<sup>か</sup>つた。(一五一)

この個所において、『破戒』における橋のおおよその意味が鮮明に見えてくる。橋が人間関係のメタファーとして機能していることが予測できるが、船橋の特徴は、洪水の際に流出が生じることと、「粗造」であること、船旅の際に障害物になることの三点である。作品が二重構造を持つ可能性の高さを考慮すれば、船橋の三つの具体的な特徴は観念レベルにおいて、何らかの形で解釈することが可能なはずである。

「粗造」であり、「洪水で流される」ことは当時の一般人と出身地によって不当な差別を受けている人々との関係が必要最小限に止まっており、非常事態が生じた場合に全く信頼できなくなる関係であると解釈できる。川は人生のメタファーとしても十分に機能するが、川の旅においてこの船橋が障害となつていることは、両グループ間の緊張した関係が人生という旅における困難をもた

らす要因であると理解できる。『破戒』で描かれる橋の大半はこのような船橋であるため、作品全体における人間関係は不安定で、信頼できないものであると示唆されるのである。

その後丑松が自殺を考える場面にも船橋が登場する。丑松がその橋を眺めていると、「上の渡しからは処迄来るうちに、もう悉皆雪だらけ」(二五三)であることに気づく。この描写は、後続場面の前触れであると考えられる。その上、「渡し」という呼び方が「私」と同音語であるために、橋の存在は丑松のアイデンティティと重なってくる。最後に、丑松の告白によって、多くの生徒は出身地区如何によって差別を受けている人々に対する偏見が間違っている事実気づくが、生徒が「軽蔑」から「理解」へと心境を変化させていく様子は見逃せない。丑松は告白によって生徒を新しい境地へと導く橋のような存在であるからこそ、彼が橋を「渡し」と繰り返し呼ぶことは、藤村が予め計画した上で導入した技巧であると判断できる。

文平が校長に丑松が同和地区出身者である事実を明かす際にも、橋が登場している。小諸の配置図は次の通り説明される。

『未だに校長先生には御話しませんでした、小諸の與良といふ町には私の叔父が住んで居ます。其町はづれに蛇堀川といふ砂河が有まして、橋を渡ると向町になる——そこが所謂穢多町です。叔父の話によりますと、彼処は全町同じ苗字を名乗つて居るといふことでしたツけ。其苗字が、確か瀬川でしたツけ。』(一七四)

つまり、丑松の故郷では、被差別者が川によって一般人から隔たれているのである。先の描写は作品全体における両グループ間の関係を集約していると言える。最後の場面で生徒が丑松の後をつけて川を渡る際、同和地区出身者の側に移動しているニュアンスが暗示されているが、文平のこの個所における描写はその解釈に貢献していると考えられる。

次の個所は、丑松が自殺を考えていた橋の場面である(二五三)。本稿では既に詳細に説明したため省略するが、他の個所と同様にこの個所においても「渡し」と呼ばれる船橋が登場し、橋の存在が更に丑松のアイデンティティと重なっていくのである。

橋が次に登場する個所において、丑松は上田駅周辺における橋の場面を想い出す。一村の選挙運動に参加している蓮太郎は、一村のライバルである高柳候補に対して『どうしても彼様な男に勝たせたく無い』(二五八)と言ったが、これは「丁度橋を渡った時にも」登場した発言であった。丑松は、飯山に来たために犠牲となった蓮太郎の断固たる決意について考え、同様の決意は自分にはないことを自覚する。しかし、この個所における橋の描写は二つの効果をもたらしていると考えられる。第一に、橋の上で話したという設定は蓮太郎が発する言葉のインパクトを強くする。第二に、蓮太郎はその橋を渡った後に自分の死を迎えるが、橋は生と死とを繋ぐ隠喩性を持つために、蓮太郎の運命を示唆する役割をも果たしていると言える。

次に登場する橋は再び「渡し」(二九二〜四)である。川の向う

側にある休茶屋に行く途中、丑松は未亡人、省吾、お志保などと出逢い、「上の渡し」を一緒に渡ることになる。実際には一同がこの橋を渡る様子を予測させる複数の描写が渡る直前に頻出している。また、その橋を渡る事実を強調する描写は、「上の渡し」の長い船橋を越えて対岸の休茶屋に着いたは間もなくであつた」（二九四）に明らかである。通常、橋を渡することはそれほど特別なことではないが、藤村は「橋を渡る行為」を繰り返し明確に描写しているために、作中において非常に重要な出来事であるかのように思われてくるのである。藤村はなぜ読者に対してこれほどまでに登場人物が橋を渡る行為を強調しているのだろうか。丑松の秘密を知った上で親友が彼と一緒に川の向こう側に渡る行為が暗示するのは、少なくとも何人かの人物が従来の偏見を放棄するような意識改革を成し遂げたということなのである。

作中に登場する最後の橋は丑松が教えていた生徒が渡つて来る「船橋」（二九六）である。その生徒は彼を見送るために正式な許可がないにもかかわらず、好意を持って丑松の後を追うという希望に満ちた結末を迎える。この場面は親友が丑松と一緒に橋を渡つた際の描写と同様に、重要な個所であると考えられる。なぜならば、橋を渡るとは常に道を歩き続ける以上に、断固たる決意を表現する行動であると言えるからである。

「新しい境地へ」行きたいという願望が橋を渡る行為を通して具現化されているために、彼等の丑松に対する支持はより鮮明に描かれていると言える。もしも物語の最後にその橋を渡らなかつたとすれば、丑松との関係はより希薄なものに見える」と読者は判

断せざるを得ないが、渡る行為を通して丑松の告白は無意味な行動に留まるのではなく、次世代を生きる若者の心に確固たる影響を与えたと理解できるのである。

### 三. テキサスへの「逃避」に関して

『破戒』全体における橋の描写が観念レベルの意味を含有していることはいくつもの描写に見られる一貫性によって判断できる。しかし、物語の思想と関連する構造は橋のみによって特定できるわけではない。橋以外のものを通過するもう一つの「渡る」行為が物語には描かれている。それは、大日向のテキサスにある「日本村」へと渡る予定についてである。

弁護士が丑松に紹介した斯の大日向といふ人は、見たところ余り価値の無ささうな——丁度田舎の漢方医者とも言ったやうな、平凡な容貌で、これが亜米利加の『テキサス』あたりへ渡つて新事業を起さうとする人物とは、いかにしても受取れなかつたのである。（二九四）

多数の批評家は、この結末が丑松の卑屈さを強調しており、しかもテキサスへと行く大日向の方向性は日本社会における重要な問題からの逃避であるとして批判している。

東栄蔵によると、藤村は丑松の問題を盛り込んだ際に、大江磯吉の経験に基づいたと指摘している。（注9）しかし、大江が丑松のモデルであるにしても、彼の人生が周囲に拒絶され続け、若死

に終わる悲惨な物語であるし、実話は読者を同和問題解消の努力へと向かわせまいだろうと藤村は判断しただろう。しかも、部落開放運動は日本社会に対してわずかな改善を求める運動ではなく、完全に公平な階級社会の実現を求める運動である。リアリティックに描かねばならないために、登場人物が目指す目的地は実存する場所にしなければならぬが、当時の判断に基づけば、人権の尊重を実現した最先端の開拓地が地上に存在するのであるならば、それはアメリカのテキサス州であることになる。

その頃実際のテキサス州は差別に満ちた社会であつたに相違ない。南北戦争後のアメリカ南部では少なくとも黒人に対する人種差別は激しかった。しかし、藤村は歴史学者としてではなく、芸術的な思想家として『破戒』を執筆したのである。独立戦争時代からアメリカは人権を重視する国の一つであり、テキサス州はアメリカの開拓地として有名であつた。その上に人権開拓を標榜する国の開拓地として登場人物がテキサス州を目指せばテキサスが人権の理想郷である印象を瞬時に読者に与える。この直観に訴える効果を狙ってテキサスが選択されたと判断できるのである。

つまり、藤村が目指していた同和問題解決とは不完全な妥協に止まるものではなく、まさに人権尊重の理想的状态を意味していた。作中においてテキサスの「日本村」へと向う大日向は具体的なレベルにおいては日本の現実からの逃避であるかもしれないが、観念レベルにおいては、彼は完全に公平な未来の日本社会を目指していたのである。現実性を帯びた物語に仕上げるためにテキサスが目的地として選択されたが、思想上においては、その目的地

はアメリカではなく、同和問題に関する意識改革後の日本であると言えるのである。

#### 四 『破戒』というタイトルの両義性に関して

表面的には、『破戒』というタイトルは丑松が父の厳命を破った行為を表わしているように見える。作品の第三章において丑松は次の戒めを父から受け止めている。

一生の秘訣とは斯の通り簡単なものであつた。『隠せ。』——  
戒はこの一語ひそよで盡きた。(一〇)

作品全体を通して、丑松はこの戒めを守るか否かに関して苦悩する。丑松は教えていた生徒に自分が同和地区出身者である事実を告白し、父の戒めを破ることになる。丑松の告白は父に言わせれば人生そのものを「破戒」する行為なのである。

しかし、物語全体を見ると、他にも「破戒」に当たる状況は発見できる。イエスが指摘した「自分を愛するようにあなたを隣り人を愛せよ」(注10)という戒めはキリスト教における最も重要な二つの戒めのうちの一つである。差別に満ちていた日本社会は、この「隣り人を愛せよ」という戒めに従っていなかつたために既に「破戒」されていたと解釈できる。

川端俊英が指摘しているように、藤村が『破戒』において提起している問題を日本の同和問題に限定することは困難である。(注11)この問題は、歴史上、普遍的に存在している人権問題である。



明治憲法は自由民権運動の影響下において成立した。従って、「天賦人權」は明治憲法の建前を支える土台であったために、明治精神は人權を表面的には重視する姿勢を取っていたが、その理想は実現するに越したことはなかった。人權の理想は明治憲法によって高らかに謳われたが、『破戒』はその実施を促す一つの重要な原動力となったと思われる。しかしながら、完全に平等な社会が出現しない限り、日本であれ海外であれ、『破戒』のような作品は必要とされるのである。

被差別集団の悲惨な状況を国に訴えろとすれば、人間は皆平等であるという思想を通して訴えるしかない。近代以前の日本社会においては偏見や差別、身分制度の温存は国策として採用されたものであったが、近代における人權の発想を通して、藤村は「日本」という国家の枠組みを越えた価値観の存在を指摘している。

最後に丑松が告白した後に、教え子が校長の警告を無視して、丑松の後を追って見送る場面がある。生徒の反抗は、その時咄嗟に生じた反抗だが、見逃すことはできない。従来の差別を促す制度に盲従すれば、生徒は丑松を認めてはならないはずであるが、丑松の告白によって生徒個人のレベルにおいて意識改革が行われたと言えるのである。設定されていた作中の時間帯において生徒が取る行為は校長の戒めを無視して丑松を見送ることのみに限定されているが、作品に描写されていない未来の時間においては、その生徒は成人となり、同様な姿勢で同和問題を解消するために努力すると推測できるのである。社会全体が徐々に変化していく予兆は作品の結末に包含されているように。校長が差別問題に対する

姿勢において「新しい人間」に困惑する描写は作中にあるが、新しい人間が次々と増えることによつて「差別を認める社会」を維持するという古い制度の「戒め」は「破戒」されていくことが予測されている。

従って、『破戒』というタイトルは丑松の告白のみに焦点化された題名ではない。「破戒」という発想は作品全体の軌道を規定する多義的な表現なのである。物語の社会的な背景として存在する隣の人間を愛さない不道徳に根ざす同和問題は人權を「破戒」する行為である。丑松は自分の身分を告白する際、父の戒めを破戒する。最後に生徒が丑松の告白に感銘を受け、丑松を肯定する行為を選択する場合、当時の日本社会が定めていた偏見に反旗を翻すことになる。出身地区によつて人間を差別する行為は暗黙に正当化されているが、無言でその不公平に耐えるべきであるというルールを「破戒」することによつてのみ救いの道が開かれるという見解を藤村は主張しているのである。

#### おわりに

藤村は、川を渡るか否かという選択を最後になぜ生徒にさせているのだろうか。人生には白黒をはっきりさせることができず、灰色の選択を強いられる場合も多くあるはずである。しかし、藤村は各登場人物に強引に選択させようとする。北原泰作は登場人物全員を人權を無視する人々と人權を肯定する人々に分けようとする『破戒』に疑問を投げかける（注12）。北原によると、この分類は極めて不自然で、リアリズムを欠いているというのである。

しかし、藤村は飽くまでも思想上の理念を打ち立てようとした。現実において部落開放運動という行動に至る以前に、まずは弾圧に抵抗する民衆の意識を究極的な状況までに高めなければならぬと考えた藤村は、敢えて問題を単純化させて描くことで読者が実際の行動へ向けて立ち上がる情動を喚起させることに専念したのに相違ない。

歴史上、小説は登場人物の個性を表現し、その発展と啓蒙を描写する文学のジャンルである。登場人物が旅によつて成長するところが作中に描写される際に、読者は小説の詳細を読みながら、脳裡において同じ旅をする。作品を鑑賞するために、読者は自らのアイデンティティを一時的に忘却し、登場人物に自己を同一化し、作家が創造した仮想風景の中に移動することになる。読後に作家の思想を否定することも勿論可能であるが、作品が巧みに描かれている場合、読者が思想的に作品から影響を受けることも予測されるのである。

アメリカの女流作家 Harriet Beecher-Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (注13) は黒人奴隷の悲惨な状態を叙情的に描写することによって、米国北部における人々の奴隷制に対する反対意識を高めることに成功し、平等思想を広めた南北戦争を生む契機をもたらした。つまり、観念のみに止まる思想小説ではなく、現実社会に変化を及ぼした成功例であると評価できよう。『破壊』もまた、作品そのものに対しては批判する声もあるとは言え、あくまで国民の思想に変化を及ぼすまでの影響力を持ったという意味では、同種の数少ない成功例として位置付けられよう。

特定の集団に対する差別は世代間遺伝する不変的必然的な状態ではなく、個人の意識改革によつて徐々に解消する類の問題である。二一世紀を迎えた現在、差別のない社会は未だに実現していないが、同和教育が学校教育の中に盛り込まれるようになった現象自体が、藤村の祈念した進歩の体現であると言える。『破戒』が同和教育の実現に貢献した度合いは計り知れない。人生は「大なる戦場」(注14)であるからこそ、藤村が『破戒』を執筆しようとしたことは周知の事実である。次世代を生きる人々の意識を改革する戦場でもある教室が『破戒』の主な舞台であり、成功への道筋もまた具体的に作品に盛り込まれている。教室における丑松の告白は後の社会に与えた影響の大きさを考えてみると、決して無意味な行為ではなかったのである。

注

- 1 島崎藤村『破戒』『藤村全集第二巻』(筑摩書房、昭和四一年)二五〇～三
- 2 ストラック・ダニエル「宮本輝の『道頓堀川』研究／橋から洞察する人生」(『北九州大学文学部紀要』第五四号)九三～一〇
- 3 J. Dome. "Meditation XVII." *Devotions on Emergent Occasions*. 1624.
- 4 E. Hemingway. *For Whom the Bell Tolls*. New York: Simon and Schuster, 1940.

- 5 三好行雄 「『破戒』論のための一つの試み／島崎藤村論ノ  
トIX」『近代文学 研究と資料』（慶応義塾大学国文学研究  
会編、至文堂、昭和三七年）
- 6 同書、四三
- 7 伊狩弘 『『破戒』の構造／藤村の現実認識をめぐって』（『日  
本文学』第三五巻第六号）
- 8 同書、四
- 9 東栄蔵 『『破戒』と部落開放』（『国文学 解釈と教材の研究』  
第三四巻第四号）五二～四
- 10 マタイによる福音書 二二章三九節『新訳聖書（口語訳）』  
（日本聖書協会、平成一年）
- 11 川端俊英 『『破戒』の社会性／評価の統一をめざして』（『日  
本文学』第二八号）八〇～二
- 12 北原泰作 『『破戒』と部落開放運動の問題』（『部落』第四  
八号）昭和二七年
- 13 H.B. Stowe. *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*.  
1852.
- 14 島崎藤村『破戒』『藤村全集第二巻』（筑摩書房、昭和四一  
年）三〇四